

令和5年度 教育事業(指導者等養成研修事業)

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村(17年目)

1 事業概要

大学生は、前半の3日間でリーダーシップや小学生への接し方、集団作りの技法、伝承文化等について学んだ。後半の日程では、小学生が参加する「子どもむかし生活体験村」の企画・運営を担当した。そして、後半の3日間を小学生とともに過ごす中で、リーダーとしての資質を身に付け、活動を通して伝承文化を小学生に伝えることができた。



2 事業の目的(ねらい)

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験を融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育む。また、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3 企画のポイント

①事前にオンラインで講義を受講することで日程を短縮して「子どもむかし生活体験村」の準備時間を確保すること、②交流の家を宿泊場所とし、交流の家やその周辺地域の素材(自然・文化・人材等)を用いて伊予の伝承文化を学ぶことを企画のポイントとした。②については、肱川の水運や大洲の郷土料理に着目し、学びを深めるための体験活動として、カヌーや芋炊き作りに挑戦するプログラムを企画した。

4 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

5 後援 愛媛県教育委員会 大洲市教育委員会

6 期日 令和5年8月22日(火)~27日(日)
※大学生を対象とした参加者講習会を7月19日(水)に実施
※子どもむかし生活体験村は8月25日(金)~27日(日)に実施

7 場所 国立大洲青少年交流の家

8 参加人数 大学生15名
〔子どもむかし生活体験村 小学校4~6年生18名(募集人数20名)〕

9 講師

白石 尚寛 氏 (大洲市立博物館 学芸員) 山崎 哲司 氏 (愛媛大学元教授)
日野 克博 氏 (愛媛大学教授) 高橋 平徳 氏 (愛媛大学准教授)
浦辻 隆幸 氏 (愛媛県教育委員会 社会教育課)
中野 好清 氏 (大洲地区広域消防事務組合消防署員)

10 日 程

	7月19日(水)	8月22日(火)	8月23日(水)	8月24日(木)	8月25日(金)	8月26日(土)	8月27日(日)
6:30			起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい
7:30			検温等・朝食	検温等・朝食	検温等・朝食	検温等・朝食	検温・朝食
8:30			カヌー(自然体験活動)			カヌー	退所点検
9:00			※荒天は所内で普通遊び体験	普通遊び体験・生活体験村の準備	受入れ準備	(荒天:普通遊び)	思い出発表準備
9:30		受付・検温	平水	(23日荒天でカヌーができなかった場合は、24日も荒天の場合は、26日に小学生と初めてカヌーに乗る。)		平水	
10:00		開村式(リーダー村)	艇庫前→うかいレストプラザ	はカヌー、24日も荒天の場合は、26日に小学生と初めてカヌーに乗る。)	開村式(生活体験村)	艇庫前→うかいレストプラザ	思い出発表
11:00		アイスブレイク	川遊び		アイスブレイク	川遊び	閉村式(生活体験村)
12:00		昼食	昼食(弁当)	昼食	昼食	昼食(弁当)	昼食
13:00		普通救命講習Ⅰ	うかいプラザ→緑地公園	生活体験村の準備	班のきまり・係決め	うかいプラザ→緑地公園	閉村式(リーダー村)・リフレクション
14:00			カヌー片付		きまり発表・ベッドメイキング	*カヌー片付は運送会社職員	解散
15:00			着替え(肱南公民館)		うちわ作り	着替え(肱南公民館)	
16:00	16:20~	うちわ作り	歴史体験活動(大洲城)			歴史体験活動(大洲城)	
17:00	ガイダンス	つどい	つどい	つどい	つどい・検温等	つどい	
17:30		検温等	検温等・夕食	検温等・夕食	野外炊飯(芋炊き)	検温等・夕食	
18:00		野外炊飯(芋炊き)	講義	生活体験村の準備		キャンドルサービス	
19:00			キャンドルサービス			思い出発表準備	
20:00					入浴	入浴	
21:00		入浴	入浴	入浴	就寝(小学生)	就寝(小学生)	
22:00		リフレクション	リフレクション	リフレクション	リフレクション	リフレクション	
22:30		情報交流会	就寝	就寝	就寝(大学生)	就寝(大学生)	
23:00		就寝					

11 活動内容

〈第1日〉8月22日(火)

「アイスブレイク」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子どもむかし生活体験村」で行われる「仲間づくりゲーム」での指導方法を学んでもらうため、グループワークゲームを行い、大学生参加者の緊張をほぐした。活動が進むにつれて、徐々に参加者の笑顔が広がっていった。



「普通救命講習Ⅰ」

講師：中野 好清 氏 (大洲地区広域消防事務組合消防署員)

大学生は、心肺蘇生法やAEDの使用方法、熱中症にならない対策や熱中症になった際の対応方法などを学び、緊急時の対応について理解した。また、全員が真剣な表情で、実技にも一生懸命に取り組んだ。



「うちわ作り」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子どもむかし生活体験村」で、大学生が小学生にうちわ作りを指導するため、その技術を習得しようと全員が熱心に取り組んでいた。また、指導する際に落ち着いてできるような時間設定や声掛けなどについても学ぶことができた。



「野外炊飯（芋炊き）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

大洲市の芋炊きの歴史に触れ、小学生が野外炊飯をする際にどのようにして安全面に気を付けて実施をすれば良いのかを考えながら活動した。楽しみながらも、小学生がいることを想定しながら意見を出し合い、真剣に取り組んだ。



〈第2日〉8月23日（水）

「カヌー（平水）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

午前中のカヌー研修では、カヌーの運び方や平水でパドルの使い方、カヌーツーリングでの笛による指示の仕方、及びリバーサインについて確認した。始めは、個人でのカヌーの操作に苦勞していた様子であったが、時間が経つにつれ、他の学生と会話をしながら笑顔でカヌーを操作することができていた。



「川遊び」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

河原では、小学生が楽しく安全に活動できる遊びを考えた。当日は熱中症対策も必要という視点から、大学生は川の中の生物観察や座っての水切り、石集めなど、体力の消耗が少ない活動を準備していた活動を準備していた。



「カヌー（ツーリング）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

午前中のカヌー研修で学んだことを生かしながらカヌーツーリングを実施した。カヌーの操作だけでなく、歴史的建造物の少彦名神社や臥龍山荘、大洲神社、大洲城などに加え、河原の様子や野鳥、魚などを見て小学生に何を伝えるのかを意欲的に学んだ。



「歴史体験活動」

講師：白石 尚寛 氏（大洲市立博物館 学芸員）

大洲城の見学では、城や周辺の歴史などについて学んだ。大洲城探索では、お城周辺の特徴について見て回り、城内では建物の特徴や歴史について資料と照らし合わせながら詳しく説明を受けた。



「ボランティア活動の意義」

講師：浦辻 隆幸 氏（愛媛県教育委員会 社会教育課）

企画するときのポイントや小学生に興味を持たせる手法などについて講話をしていただいた。参加者は、時間に余裕を持ったプログラム構成や小学生の実態に合わせた内容にしなければならぬと感じていた。また、小学生に説明するときには、どのように伝えれば分かりやすく伝えることができるか、どのようにすれば小学生が興味を持つかなど具体的に考えることができた。



「キャンドルサービス」

講師：玉井 義幸 氏（国立大洲青少年交流の家 研修指導員）

キャンドルサービスの構成や楽しむための手法について玉井氏より学んだ。厳かな雰囲気や楽しむ場面を区別するためのポイントを具体的に体験しながら学ぶことができた。



〈第3日〉8月24日（木）

「昔遊び・生活体験村の準備」

講師：高橋 平徳 氏（愛媛大学准教授）、国立大洲青少年交流の家 職員

各役割担当で話し合いながら準備を進めた。その際、小学生の目線に立って考えたり、大学生役と子供役に分かれて役割演技したりするなど、意欲的に準備に取り組む姿が見られた。



〈第4日〉8月25日（金）

『子どもむかし生活体験村』開村式・アイスブレイク」

大学生が、開村式やアイスブレイクの進行を行った。アイスブレイクでは、担当者以外の学生も積極的に小学生と関わり、緊張をほぐし、子供たちの表情が豊かになっていくのを感じた。



「班のきまり・係決め・きまり発表」

各班での目標を立てた。大学生は小学生から思いや言葉を聞き、班全員の思いを画用紙にまとめた。大学生の支えがあり、小学生は発表の時にしっかりと班のきまりを発表することができた。発表前には、大学生が小学生に発表のポイントをアドバイスしたり、発表時に優しく見守ったりする姿が見られた。



「うちわ作り」

大学生がうちわの作り方について準備していた資料を使って小学生に指導した。班の仲間で協力してうちわ作りを進める過程で話も弾み、時間とともに打ち解けていく様子が見られた。特に、うちわに描くイラストを大学生と小学生が相談しながら決めている姿は、見ていて微笑ましかった。



「野外炊飯（芋炊き）」

野外炊飯場を利用して芋炊き作りを行った。大学生は事前に学んだことを生かしながら感染予防にも気を付けて、子供たちと楽しく調理をしていた。また、食材を切る係やかまど係などの役割分担をして協力して取り組んだ。美味しい芋炊きを作るため、小学生と大学生が積極的にコミュニケーションを取り、調理に励んでいた。



〈第5日〉8月26日（土）

「カヌー（平水）」

カヌーの運び方や平水でのパドルの使い方、カヌーツーリングでの笛での指示の仕方、及びリバーサインについて確認した。大学生は、班員の小学生の行動を観察しながら的確にアドバイスし、小学生は楽しくカヌーを操作することができていた。



「川遊び」

当日は熱中症対策に留意して、座ってできる遊びや川の中の生物観察など、小学生に体を休めることを意識した活動を選択している学生が多く見られた。大学生が進んで小学生の体調管理や安全に気を付けて活動していることがうかがえた。



「カヌー（ツーリング）」

午前中に学んだカヌーの操作を生かしながらカヌーツーリングを実施した。カヌーの操作だけでなく、友達と会話をしたり、歴史的建造物や景観などを見て楽しくツーリングしたりすることができた。長距離を移動するため、大学生が小学生を励ます場面が多く見られた。



「歴史体験活動（大洲城）」

学芸員の白石氏から学んだことを小学生に分かりやすく説明したり、問題形式にしたりして大洲城までの道のりを楽しんだ。大洲城では、班活動をして一緒に場内を巡った。大学生と小学生は同じ目線で見学し、外の景色を楽しんだり、城内に大工が遊び心で製作したテントウムシやネズミを見付けたりする活動にも取り組んでいた。



「キャンドルサービス」

玉井氏からいただいたアドバイスを基に、プログラム担当者だけでなく、他の学生たちも協力して入念な準備を行った。本番が始まると、厳かな雰囲気を作ったり、場を盛り上げたりして楽しい一時を過ごすことができた。大学生と小学生がみんなで楽しい時間を作り、蝋燭の火を囲んで一つになることができた。



〈第6日〉8月27日（日）

「思い出発表」

担当の大学生リーダーが司会を務め、思い出発表を行った。小学生が各班で思い出を発表し、他の班の小学生や大学生、保護者が発表を聞いた。小学生は、生き生きとした表情で、印象に残った活動内容や班全体の成果などを発表した。



「閉村式（子どもむかし生活体験村）」

代表の小学生が3日間の感想を発表し、村長（所長）が挨拶した後、大学生が閉村式を締めくくろうとした時、小学生から大学生へのサプライズが行われた。前日の夜に大学生が振り返りを行っている間に練習した、歌と感謝の色紙が大学生に贈られた。会場にいた保護者の涙も誘い、3日間の共同生活が締めくくられた。



「閉村式（リーダー村）」

大学生がリーダー村での感想を発表し、愛媛大学職員、交流の家職員、OBなどが感想を述べた。大学生の感想から、想像していた以上の感動体験をすることができ、そこから学ぶことがたくさんあったことが伺えた。閉村式後にも、大学生が一丸となって片付けを行い、5泊6日でより積極的に行動したり、意見を出し合ったりする姿が見られるようになったと感じた。



1 2 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【大学生】 *満足：100% *やや満足：0% *やや不満：0% *不満：0%

- 子どもが楽しんでいる様子を見られて嬉しかった。自分にとってもたくさんの学びがあった。
- しんどい部分もあったが、自分を成長できるいい機会になりました。
- とても勉強になった5泊6日でした。貴重な経験をありがとうございました。

【小学生】 *満足100% *やや満足：0% *やや不満：0% *不満：0%

- 全部すごくおもしろかった。楽しかった。(10歳・女子)
- 初めての体験をたくさんできた。(11歳・女子)
- カヌーが一番楽しかった。(10歳・男子)

1 3 事業の成果

本年度は、事前に大学側と開催日程を調整したことで、参加する学生15名を確保できた。そのうち、過年度の経験者5名を上級者とする体制がとれたことで、スムーズな運営につながった。プログラムにおいては、「子どもむかし生活体験村」の準備時間を十分に確保したことで、学生がそれまで学んだ知識や技法をしっかりと確認しながら、主体的に準備や運営に携わることができた。また、毎晩リフレクションを実施することで、学生が個々のめあてや課題を明確にでき、一人ひとりが楽しみながらもそれぞれの課題に真剣に向き合うことができた。満足度100%のアンケート結果や学生の感極まる感想の数々からも、成果の多い事業であったといえる。

1 4 事業の課題

本事業は、大学と青少年教育施設が連携して実施しているモデル事業である。来年度も、愛媛大学との連携を密にし、参加する学生にとってより教育効果の高い事業にしたい。特に、伝承文化を学び伝える側面の強化を図るため、コロナ禍前に利用していた茅葺き民家「土居家」の活用を検討したい。また、夏期の実施のため、暑さ対策を万全にし、体調不良者を極力出さないプログラム設定に努めたい。

(担当：企画指導専門職 二宮啓)